

最強最悪魔王は
ドジっ子巨乳勇者を
絶倫巨根で墮とす！
体験版

がら堂 / どん丸

高校生を含む18歳未満は閲覧禁止です。

この話はフィクションです。実在の人物や団体とは一切関係がありません。

なお、この話は犯罪行為を助長するものではありません。決してマネしないでください。

本書の内容、テキスト、画像等の無断転載・無断使用を固く禁じます。

Unauthorized copying and replication of the contents of this book, text and images are strictly prohibited.

「見つけたぞ魔王っ！ 退治してやるっ！」

「……………お前が噂の勇者だな？」

とあるファンタジーな世界にて。

薄暗くい森の奥に禍々しくデン！ と建っている明らかにヤバそうな古いお城に、勇者は来た。

言うまでもなく、魔王退治のためである。

ここには人間たちが、否、この星に住まうありとありゆる生き物たちが恐れる魔王がいるのだ。魔王は魔族なのだが、魔王に比べたら他の魔族など戦車とミニカーくらいの差があった。

世界中を旅して悪い奴を倒している勇者の噂を流石の魔王も知っていたのだが、偉い人しか座れなさそうな、もつと言うと座った人が呪われそうな、装飾過多な椅子に座ってふんぞりかえりながら、

勇者、思ってたのと違うな、と思った。

何せ魔王は、勇者は筋肉隆々なのにスラッとしていてスタイル抜群でブロンドのサラサラ髪に透き通るような水色の瞳を持った爽やかイケメンなのだろうと勝手に思っていたからだ。

魔王はそういうイケメンが大嫌いだっただけで、性格ねじ曲がった男はみんなそうなので、魔王も普通の男だった。だからうちの城にもやってきたら絶対殺す、と思っていた。

しかしやってきたのは、こじんまりとした女の子だった。

そう。勇者は女の子である。

身長は百六十にも満たないような小さきで（魔族は総じて身体がでかいので魔王はそう思った）、肩にかかるくらいの栗色の髪は赤子かというくらい細くふんわりと柔らかく、飛び出やしないかたち

よつと心配になるくらい大きな黄緑色の瞳はこんなに薄暗い城の中
でもなぜだかキラキラと光っている。そして、おっぱいが大きい。
小さな身体と幼い顔つきだが、おっぱいのおかげで魔王は勇者が子
供ではないのだらうと見分けた。

ふんふんと鼻息荒く剣を構える勇者はまあ簡単に言えば非常に魔
王のタイプであった。

いかつい顔にデカイ屈強な身体ではあるものの容姿端麗で魔族の
中では一番強い魔王はモテにモテていて、魔族の女たちはこぞって
魔王に求婚していたが、魔王はちよつと遊ぶだけで本気にはならな
かった。

その理由がこれである。魔王はちっちゃくてかわいいものが好き
だった。一応言っておくがロリコンではない。おっぱい大きいのも

大好きなので。つまり合法ロリ巨乳が性癖。

ちなみに魔王は硬そうな黒髪に頭からは強そうなツノが生えていて、ついでにしっぽも生えていて、身長は二メートルありそうなくらいで、程よく筋肉がついていて逞しい。シャープなフェイスラインやスツとした鼻筋、牙の覗く薄い唇、涼やかな目元は一睨みで猛獣でさえ逃げ出しそうな赤い瞳で、そんなパーツの配置された顔は確かに整っている。魔界では傾国と呼ばれた女性でさえ傅くような美丈夫なのだが、人間界からすると、恐くてチビる容姿であった。なまじ整っているのが恐怖感を増していた。

しかし、勇者を嫁にするのはどうかな？ と倫理観のかけらもない魔王でも流石に思った。

勇者は魔王を退治しようとしているわけであるし。落とすのも楽

じゃない。

魔族の連中も反対するだろう。まあ、それはどうでもいいか。魔王は人の意見など気にするような男ではなかった。魔王の魔王たる所以。

欲しい物は何をしてでも俺の物にするが要らない物は目にもしたくないので壊す殺す捨てる、という究極のジャイアニズムを持った魔王がウンウンと頭を悩ますのは初めてのことだった。

抱くのは簡単だがどうせなら相手からも求められたいのが男つてものである。

さて、魔王が相手をどう苦しめ屠るか高笑いする時以外にはほぼ使ったことのない脳みそを使っている間に、勇者は勇敢にも剣を構えて魔王に近づいていった。

がしかし。

「ぎゃんっ！」

あとちよつとであのヤバそうな椅子に座っている魔王に手が届く、というところで、勇者はすってんころりと転んでしまった。派手な音を立てて剣が床を滑っていく。

この勇者、実は、とんでもないおっちよこちよいであつた。

別に弱くはないがおっちよこちよいなせいでよく危険な目に遭つて、でも可憐な見た目とそのおっちよこちよいさで敵を油断させてやっつけるという、無意識にせこい技を使っていた。つまり合法口リ巨乳プラスチック子は最強だつてこと。

魔王はそれを無感情な目で見下ろしていた。

否、スカートが捲れて丸出しになったぷりんとしたお尻をじつと

見ていた。

おっぱい派の魔王は、尻派の前魔王である父親と女はおっぱいかお尻かで言い争いになった挙句全魔族総出の戦争を起こし父親を殺して魔王となったのだが、ここで初めて父親に謝りたくなつた。尻も、いい。

ちなみにこの魔族の大戦争は人間界でも有名なのだが、まさかきっかけがおっぱい派かお尻派かだなんて馬鹿げた理由だったとは知る由もないだろう。というか知らない方が良い。いやもつと言うと魔族も知らない。「魔族は滅ぶべき」と高らかに言う人間を魔族は敵視するが、このことを知ってしまったら魔族もそう言い出してしまふ可能性は大きい。

「よ、よくもやったなっ！」

ぱっと立ち上がった勇者は、おでこ膝小僧を真つ赤にさせていたし、ちよつと目は潤んでいたので、魔王の魔王は元氣になってきた。

勇者はキョロキョロして劍が遠くまで飛んでいってしまったのを見て、仕方なさそうに腰につけた短劍を取った。

とその時。

「わっ！」

勇者は手を滑らせて、短劍で自分の胸元を薄く切ってしまった。それに魔王は思わず腰を浮かす。国宝級のおっぱいに傷がつくなど許せることはなかったからだ。

幸運にも、短劍が傷つけたのは服だけだった。

不運にも、切ってしまった服はべろんとめくれ、大きなおっぱい

がぼろんっ♡ とこぼれた。

要はラツキースケベである。

「きやあっ！」

今まで意識して声を低くしていたのだろうと思わせる高く可愛らしい悲鳴をあげて、勇者は短剣を手放し剥き出しになってしまったおっぱいを押さえた。

大きなおっぱいは勇者の小さな手や細い腕では隠しようがなく、ぎゅっと押さえられたせいでさらにエロくなっただけだ。

魔王は鼻を押さえた。魔族も人間と一緒に興奮すると鼻血を出す。しっかりと肌色とそこまで変わらない薄ピンク色の乳首を見た魔王の魔王はまた大きくなった。

「み、み、見たっ!!」

「……………見てない」

「絶対見たっ！」

顔を真っ赤にさせて涙を浮かべる勇者は本当に可愛くて、魔王はそろそろ我慢できなくなってきた。そもそもトイレ行きたいけど近くにトイレがない時しか我慢ということをしたことのない男である。しかし、勇者は、バカだった。

「絶対見たもんっ！　ち、ちんちんおっきくなってるじゃんっ！」
「……………」

魔王は勃った。間違えた。立った。

つかつか、とゆっくりと近づいてくる魔王を勇者は気丈にもキツと睨みつける。身体は少し震えていて、捕食される前の小動物のようだ。

魔王は勃った。間違えてない。

「ヤリやいいんだろ、ヤリヤ」

「きやんっ！」

ふるふる震えている勇者の柔らかい腰をぐわひと両手で掴んだ魔王は、そのまま勇者を担ぎ上げた。俵担ぎである。魔族はお姫様抱っこをするとサブイボが立って最悪死ぬ。

そう身長の高くない勇者だが、世界中を回って悪者退治をしているだけあって、筋肉がついていて女性にしてはみっちりした体つきをしている。むっちりではなくみっちり。ムキムキというほどではないが、骨太。細くも太く見えない。骨格ストレート。つまり何が言いたいかというと、体重は決して軽くない。

一応女の子な勇者はそれをちよっぴり気にしていたのだけれど、

魔王は軽々と勇者を担ぎ上げた。幼い頃から自分の身体の十倍はあ
る魔獣だとかドラゴンだとかをぶん回して遊んでいたもので、女の子
にしてはちよつと重いかな？　くらいの勇者など「羽のように軽い」
ってやつなのだ。まあそれを言うとな魔族はサブイボ以下略。

とにかく魔王はそんなリング五個分みたいな軽さの勇者の体重な
んでどうでも良かった。問題は肩から背中にぽよんっ♡　ぽよんっ
♡　と当たっているおっぱいだ。勇者が放せ！　と暴れるのでな
おさら。

別にここでやってもよかったのだが、ここはたまに下っ端がやつ
てくるので、寝室に連れていくこととした。自分のメスのエロいと
ころを他のオスに見せるのは我慢ならなかった。ちなみにいつ
もはどこでもやる。遊んでるだけのメスが他のオスにどうされよう

とどうでもいいのだ。

「な、なに、なんでこんなところ……きやんっ！」

自室のベッドの上に勇者を雑に下すと、魔王は馬乗りになって舌なめずりをした。

魔王は地獄のマグマの源泉でも爆睡できるような生き物としてちよつとおかしい生き物なのだが、寢室を持っている。

幼い頃自分の世話をしていた魔族たちで遊んでいたら父親に「そんなに元気なら村の一つでも潰してこい！」と人の住む村にポイとやられた時、すぐ帰るのもつまらないからちよつと人間のフリでもして村に溶け込んでみようとしたところ、人間はベッドなる物で寝ると知ったのだ。これがとてもふかふかで寝やすかった。

魔族は自分が初めて殺した生き物に樹脂をかけて固めた物に寝る

という風習がある。最初に殺したのが蚊とかだったら最悪なのでや
つていない者が多いが、魔王が初めて殺したのはドラゴンだっ
たので体が大きくなった今でも余裕で寝られている。

しかしベッドを知った後ではもうダメだった。村を滅ぼしてから
王都に行って寝具屋で一番良いベッドを作らせ、持って帰った。寝
具屋を潰すわけにはいかなないので王都を潰すのはやめておいた。も
ちろん金は払っていない。

「な、なに、どいてよっ！」

「良い声で啼けよ」

「な、んむっ！ んーっ、んーっ！」

ふかふかのベッドの上で抵抗しても魔王に縫い留められるだけの
勇者は、簡単に魔王に唇を許してしまった。その上、叫んでいたせ

いで開いている口内に舌が侵入してくる。

魔王の舌は薄いが長く、先が二又に分かれている。自由自在に動く二又は小さくこじんまりとしているが肉厚の舌をチロチロとくすぐるように舐めたり、挟んで扱いたり、とにかく好き勝手した。

どエロい体してるのに奇跡的に純潔を保っていた勇者は、百戦錬磨の魔王に簡単にやられた。数分に及ぶデーブキスで、勇者は最終的に抵抗できなくなっていた。

ようやく唇を解放された勇者は息も絶え絶えで、アルコール六十六度くらいの効果のある魔王の唾液を飲まされて頭がぼんやりしてしまっている。

もにゅん♡

「んあ♡」

「勇者のくせに、こんなにでかい乳してていいのか？」

「ひゃあんっ♡」

勇者の大きなおっぱいは、何もかもデカイ魔王を持ってしても手からはみ出す有様だった。

もにゅん、もにゅん、もにゅん♡ と魔王は無心にそのおっぱいを揉みしだいた。何十何百人もの女と遊んできた魔王だが、サイズ、重量感、柔らかさ、乳首の大きさ、色、そして反応と、全て百点満点のおっぱいは初めてなのだ。尖った爪で肌を傷つかせないように気をつけたのも初めてだった。

おっぱい星人を唸らせるおっぱいの持ち主である勇者は、もうあんあん喘ぐしかできなくなっていた。おっぱい揉まれるのは初めてなのに、魔王の唾液のせいなのか己の資質によるものなのか、とに

かく感じている。

「あんっ♡ だめ♡ やあ、はなしてえっ♡」

「敵に乳揉まれてあんあんよがっついていいのか、勇者よ」

「ひゃあん♡ だって、だってえ♡」

こいつかわいいな。

魔王は生まれて初めて生き物を愛おしいと思う気持ちを持った。勇者は感じながらもこれはいけないことだという自覚があるので（というかレイプのはずだこれは）魔王を引き離そうと腕に力を込めるが、魔王からしたら子犬が戯れてるみたいなのなので微塵も気にしなかった。魔王に戯れるような勇敢な（もしくははバカな）子犬はこの世に存在しないが。

「んあっ♡」

「エツロい顔だな」

「ぎ、さきっぱは、やあんっ♡」

「やなのか？　これが？」

「だめえ、くりくり、しないでっ♡」

「じゃあ、こうか？」

「ああっ♡　摘んじゃ、あっ、ああっ♡」

大きなおっぱいの真ん中で色づいてきた乳首を指の腹で弄ぶと勇者はまた可愛らしい声をあげるので、魔王は楽しくなって肌とその色の変わらない薄い乳首が腫れ上がって真っ赤になるまで弄ってやった。

おっぱい星人の魔王といえど今まで遊んできた女たちに自分にとって魅力的なおっぱいを持っている者はいなかったので、こんなに

楽しいのは初めてだった。反応を楽しく思うのも初めてだ。いつも途中で飽きて突っ込んで出して終わり、みたいなものだった。

つまるところ、魔王はヤリチンだが、素人童貞みたいなものでもあった。いや語弊だけど。語弊だけど、ほぼ素人童貞。

「も、乳首、やだよおっ……♡」

「真っ赤に腫れたな。怪我は舐めれば治るものなんだろう？ レロツ

♡」

「あ、ああんっ♡」

「レロ、レロ♡ チロロロツ♡」

「あ、や♡ そんなとこ、舐めちゃ、あんんっ♡♡」

二又の舌で乳首を舐められ擦られ挟まれ扱かれ、勇者は腰をビクビクと跳ねさせた。既にガン勃ちした乳首にそれは、処女には過ぎ

た刺激である。

魔王はその腰をしつかりと抱きしめて動かぬよう固定して、白いおっぱいに何度もちゅっぽおっ♡　ちゅっぽおっ♡　と吸い付いて赤い痕をいくつも付けた。その度にたゆんたゆん♡　と柔らかそうに揺れるおっぱいが同じように魔王の脳みそも揺らした。

「ふあ、あー♡　おっぱい、そんなしちや、だめだよ♡」

「そんなエロい顔してても、説得力ないぞ」

「え、えろく、ないっ！　んあっ♡」

「蕩けた顔をしてよく言う。ちゅっぽっ♡　ちゅるるっ♡」

「ふあっ♡　吸うの、らめえ♡」

とうとう魔王は、勇者の乳首に吸い付いた。魔王を恐れる者たち、つまりこの世界中の生き物全てが見たら卒倒するような行為である。

あの魔王が、人間の女のおっぱいに、赤子のように吸い付いているなど。

もちろんこの行為がそんな可愛らしいものであるはずはなく、口に含まれた乳首は緩急をつけて吸い上げられ、時折二又の舌で扱かれ、もう片方の乳首は指先で捏ねくられた。その上おっぱいはアルコール六十度ばりの唾液を経皮摂取し、さらに敏感になる。

「あうう♡ も、だめえ♡ ちくび、だめだよ♡」

「ん？ 人間の女は母乳が出ると聞いたが、出ないな。もつとか？ ぢゆるうくくつつ♡」

「ふにやああつ♡ 出ないっ♡ 出ないっ♡ 赤ちゃんできないと、でないもんっ♡ ああくくんっ♡」

「ほう？ 孕めば出るのか。いいことを聞いた」

ようやく乳首を舌で虐め抜くのをやめた魔王は顔を上げ、薄い唇をぺろりと舐めた。

魔王が何を考えているかわかっていない勇者は、執拗な愛撫が終わったことに目に見えてホッとしているが、「これで終わり？」と物足りなさを感じているのも事実だった。

ま、もちろんこれで終わるはずもなく。

むしろここからが本番で。

「ひゃっ！」

「いい眺めだ」

続く

最強最悪魔王はドジっ子巨乳勇者を絶倫巨根で墮とす!_体験版

2021年10月8日発行

♡どん丸／がら堂

♡Twitter : @donmar18